

すぎなみ大人塾（昼コース）
公開講座

「カフェ文化とまちづくり」

（有）カフェスロー代表
あつし

吉岡 淳さん

日時：2007年11月18日

会場：あんさんぶる荻窪

【プロフィール】

1947年京都府生れ。30年間にわたり日本ユネスコ協会の事務局勤務を経て、2001年に自身が暮らす東京府中市に、ナマケモノ倶楽部の拠点として「カフェスロー」をオープン。代表として経営に携わるかたわら、大学やカルチャーセンターの講師として、「環境教育」「平和教育」「人権論」「NPO論」「ユネスコ世界遺産」の講座を担当している。著書に「カフェがつなぐ地域と世界～カフェスローへようこそ」（自然食出版社）がある。

世界規模での取り組みから、地域での取り組みへ

現在、「カフェ文化」は多様な広がりを見せています。昔ながらの男性客が中心の喫茶店があり、一方、清潔で女性ひとりでも入りやすい雰囲気のカフェなどもあります。私が経営している「カフェスロー」は、コミュニティカフェでありながら、そこに“情報発信”機能を持ったスペースとして展開しています。なおかつ、どこかで世界とつながっている。そういう方向を目指しながら、環境問題や世界の平和といった、さまざまな切り口を広げていきたいのです。なぜ、そういったカフェづくりをするのかといえば、私たちの日常の在り方を問い直したい。そういう思いが根底にあります。日常生活の問い直し、あるいは気づき、そういったもののヒントとなるような場所としてのカフェです。環境問題や人権問題など「問題」と括られるものは、私たちの日常生活と切り離されたところで議論されがちです。一方、ナマケモノ倶楽部では、さまざまな問題を自分たちの日常の生活を通して問い直そうとしています。地域社会を含めて、自分の足もとから考える。私たちの日常生活と、それら「問題」との関わりを考えようというところに、ポイントがあります。私たちのお店のキャッチフレーズも、少しおこがましいのですが、「地球に負荷をかけないライフスタイルの提案」としています。

環境保護運動など、いま、さまざまな問題と取り組む運動が世界中で展開されています。そういった運動に対しては、敬意を表しますが、一方で、それらの運動と取り組んでいる人たちの個人的な生活が、乖離しているのではないかと、そんな危惧を抱くことも少なくありません。生活者としての視点が失われ

ているのではないかと、思うのです。環境保護が大切というのなら、その前に、私たちの生活の何が環境に負荷をかけているのか。まず、足もとを見つめ直すところから始めるべきではないでしょうか。

私自身、約 30 年間にわたってユネスコの事務局に勤務しましたが、そこでは、どちらかといえば、世界の環境問題、世界の平和問題といった“大状況”の中で、問題や課題と取り組んできました。そういう中で、一体、自分はどこに根を張って暮らしているのか、といった疑問が芽生えてきました。そして、地域の中で、環境や平和といった問題と取り組んでみたいと考えるようになりました。ちょうど、ユネスコ活動が 50 周年を迎えた 1995 年、それまでのユネスコ活動に対する見直しがありました。たとえば、国と国とが取り決めをただけでは、平和を実現することは不可能です。人々が暮らしている地域の中の、さまざまな課題を解決しなければ、真の平和は実現できません。私自身も、自分の暮らす地域のことについて、まったく知らないことに気づきました。地域の人たちとつながりの中で、自分が取り組んでいる問題に向き合うことにしたのです。

たかがコーヒー、されどコーヒー

そこで、ユネスコから離れ、国内や海外、これまで私が知らなかった世界を訪ねてみることにしました。特に、世界の先住民の人たちが暮らしている地域を数多く回りました。そこで改めて気づかされたのは、地味だけれども、常に足もとを見つめて暮らしている人々の生活でした。北米で出会った、ある先住民の人たちは、何か物事を決める際には、つねに“七代先”のことを考えて決めるという習慣を持っていました。七代先といえば、200 年先のことを考えるということですね。その地域では、トーテムポールを作ることが重要な地域の習わしになっているのですが、その材料となる一本の木を選ぶのに、村中の人々が将来を見据えて話し合うのです。漁業においても、つねに持続可能な生活を前提に、魚を捕る量を決めているのです。こういった人々の生活を見て、改めて思ったのは、地域ごとの人々の生活が、世界のさまざまな問題と、どこかでつながっている、ということでした。そして、環境や平和問題と関わる時、大上段に構えるのではなく、自分たちの日常生活の中で考え、取り組むことの大切さを痛感しました。

特に、私にとって強く印象に残ったのが、南米、赤道直下にあるエクアドルという、日本の四国と九州を合わせたような小さな国です。エクアドルには、豊かな生態系が残されているのですが、残念ながら、その 9 割くらいが破壊されてしまっています。そのエクアドルに、昔ながらの方法でコーヒー栽培を続ける人々がいます。大手のフランチャイズのコーヒーメーカーは、世界中で、コーヒー豆の栽培をしていますが、現地の人々の暮らしを豊かにはしていません。それどころか、搾取がひどく、栽培すればするほど生活が苦しくなるという悪循環に陥っています。加えて、大量生産のため、大量の農薬も使用しています。私たちが日常何気なく飲んでいるコーヒー、その量が増えるほど、コーヒー豆を栽培している人たちの生活を圧迫しているのです。一方、エクアドルの、そのコーヒー豆農園では、一切農薬を使わずに栽培しています。また、木を一切切らない、“森を育てる”コーヒーなのです。収穫量は少ないものの、その香りの豊かさ、味の濃さは、他にはありません。

「こんなコーヒーがあったのか！」。私は大きな衝撃を受けました。小さなコーヒー豆が、南北問題や環境問題といった、世界の問題を象徴する存在として、私の目に映ったのです。ナマケモノ倶楽部が提唱する「地球に負荷をかけないライフスタイル」を象徴するものとして、このコーヒー豆を活用できないか。そこで、いま現在、私の住んでいる府中市でカフェを作ろうと思い立ったわけです。

「カフェスロー」誕生

いよいよ、カフェ作りに向けての作業が始まりました。2001年4月、ナマケモノ倶楽部の会員を中心に地元府中市の人たちを集めて設立総会を開催し、その場で、私が代表取締役役に就任することになりました。また、カフェ作り作業は、業者任せにするのではなく、私たち自身が中心となって行うことに決めました。特にこだわったのは、カフェの内装。藁ブロックで作ろうということになり、滋賀県から稲と葦藁を仕入。内装工事は、ほぼ、私たち創立メンバー、そして地域の学生ボランティアの人たちが中心に行いました。

詳しくは、カフェスローのHP = <http://www.cafeslow.com/> 「カフェスロー準備日記」参照

5月22日、カフェスローがオープン。オープニングイベントには250名を超える人々が参加し、オープンを祝ってくれました。特にうれしかったのは、コーヒー嫌いだっただけの人たちが、「こんなにおいしいコーヒーがあったのか」と、コーヒーを見直し、コーヒー好きになってくれたことです。

オープンして6年。お店では、さまざまなイベントを開催してきましたが、記憶に残っているのは、オープン間もない、6月の夏至の日のこと。アメリカのブッシュ政権が打ち出した「エネルギーをもっと使おう」という政策に対して、インターネット上で、反対の意思表示をしようという議論が起こりました。そして、「Roll Your Own Blackout (一人一人の暗闇で手をつなごう!）」と銘打ち、6月21日(夏至)の夜、7時から10時までの3時間、部屋の電気を消し、プラグを抜けるものは抜き、暗闇の中で過ごしてみよう、というムーブメントが立ち上がりました。カフェスローも、それに参加しようと、夏至の当日、夜の8時から10時まで消灯して「暗闇カフェ」を営業しました。電気を消して営業するなど、ちょっと考えられないことですが、お客さまにはとても好評でした。ろうそくの明かりは落ち着く、癒される、と。電気を使わないので、CDをかけることもありません。そこで生演奏の音楽会を開催しようといことになりました。生の演奏会なんて実に贅沢なことでしょう。特に宣伝はしなかったのですが、口コミで広がったのか、暗闇カフェに関心を持つ人が増え、来場者が毎回増えています。私は、大学でも講義をしていますので、よく、学生たちにも、「家庭でもやっごらん」と“暗闇の効用”について話をします。実際に試してみた学生が、ローソクを囲んで家族で話をした経験を話してくれたのですが、普段、ほとんど親と話すことなどなかったのに、ローソクを囲むことで話しが弾んだと、新鮮な驚きを感じているようでした。ローソクには、人の心を開く、会話を促すといった大きな効用があるのです。やがて、「暗闇カフェ」を定期的にやろう、ということになり、月に1回、それが2回となり、現在では、毎週1回、金曜日の夜に開催しています。外から店を見たら、薄暗くて、営業をしているのか休業中なのか分からない。でも、多くの人が集まっている・・・ちょっと不思議な光景に映るようですね。

こういったことを通して、自分たちの日常生活を見直し、振り返ることにつなげていければ、と考えています。イベントには、さまざまな人たちが集まりますので、多様な意見、経験を語り合い、コミュニケーションを広げていくこともできます。

(ビデオ:「カフェスロー」取材したテレビ番組の紹介)

“ コミュニティセンター ” 化するカフェスローの現在

ビデオでご覧いただいたように、カフェスローの店舗は、外から見ると、一見カフェには見えません。宗教団体のアジトではないか、などと思われたりするなど、オープン当初は、来店者はごくわずかでした。ところが、ユニークな店なので、ライブをやらせてほしい、といった申し込みがあり、そういう人たちに店を開放したりするうちに、徐々にお客さまが増えてきました。特に最近増えたのが、赤ちゃんを連れてお母さんたちです。カフェスローでは、「地球に負荷をかけないライフスタイルの提案」に加え、「子育てを支援する」もスローガンに加えています。ゼロ歳児連れOKのライブも開催しています。50人くらいの大人と30人くらいの赤ちゃんが参加するという、一見不思議なライブですが、他にはないユニークな取り組みだと自負しています。

このように、現在、カフェスローは、“ コミュニティセンター ” 化しつつあります。店舗の2階には、小さな会議室やNGOの共同事務所もあります。また、3階は、元々倉庫だったのですが、畳屋さんから、使わなくなった畳（捨てると産業廃棄物となる）を譲り受けて敷き詰め、さまざまな教室や講座を開催する多目的スペースとして利用しています。こういう取り組みを通して、さまざまな人々の交流があり、情報発信することが可能となっているわけです。店舗にも、さまざまなチラシが置かれ、環境問題に関する図書コーナーなどもあります。

元々、私はユネスコで、さまざまな運動と取り組んできましたので、商売というものを毛嫌いしていました。商売イコール金儲け、金儲けなんてとんでもない、と。しかし、カフェスローを経営する中で、ビジネスは、運動以上に、大きな訴求力を持つことに気づき始めたのです。運動は、自分が好きで取り組むものです。一方、ビジネスでは、価値を創造しなければなりません。価値に対する評価として、お客さまからお金を払っていただくわけです。納得しないものには、お客さまはお金を払ってくれません。ビジネスに、そのような力があるからこそ、環境を破壊するビジネスではなく、環境を守るビジネスを展開しなければならない、と思うのです。

最近では、北海道から沖縄まで、さまざまなところからお客さまが訪れます。これまでに、エコレストランに代表されるようなお店はありました。しかし、「安全」だけれど「まずい」というところも少なくありません。お客さまは、「安全」で、しかも「おいしい」ものを求めています。私たちの店では、自然の食材を使った、安全で、しかもおいしい食事、デザートを提供するよう心がけています。お客さまだけでなく、カフェスローのような店を作りたいという方も、全国から視察に訪れます。現在、“ カフェスロー・ネットワーク ” なるものを構築し、私たちが培ったノウハウを公開しています。

私たちは、環境問題のみに取り組んでいるわけではありません。この地球、社会、地域が、持続可能なものであるよう、自らのライフスタイルの中で取り組み、実現しようと考えているのです。その提案の場としてカフェスローがあります。

現在、7名の従業員が働いています。実は、開店から1年は、無給で働いてもらっていましたが、現在、それほど高額ではありませんが、きちんと給与を支払えるようになりました。また、休日は、当初週に1日だったのですが、2日にしたところ、何と、売上げが伸びたのです。2日間、きちんと休みを取ることで、従業員も心身ともに充実して働けるようになったことが大きいと思います。接客にも良い影響を与えていると思います。

不思議なことに、私たちの店は、ゴールデンウィークなど、一般的にはお客が減るだろうと思われる時期こそ来店者が増えるのです。先日の日曜日も、朝から夕方まで、ずっと居続けたお客さまがいっぱいいました。よほど居心地が良いのでしょうか。店の立地も、駅から歩いて15分くらいと、決して恵

まれたものではありません。しかし、駅前の便利なところと比べて家賃も安く済み、広いスペースも確保することが可能でした。それが経営の安定につながっているのだと思います。地域密着という意味では、店で使う食材も、できる限り、地域から仕入れるようにしています。「地産地消」ですね。畑を借りて、自分たち自身で食材を作る試みも始まっています。

ひとつだけ、課題があります。「暗闇カフェ」の時以外は、東京電力さんのお世話になっています。店の看板の電飾だけは、ソーラーを利用した自己発電を実現していますが、店のすべての電力を自己発電で賄いたいというのが、私たちの夢なのです。厨房では、燃料電池を使い、東京ガスからのガスの供給は受けていないので、次は電力、というわけです。それも、私たちだけの資金だけでなく、地域の皆さんの協力を仰ぐ形でやりたい。地域と、地域に暮らす人たちとのつながりの中で実現したい、と考えています。